キズナエピソード

朝永 花織　1話

//ヴィジュアルノベル形式開始

悪魔どもとの激しい戦いに勝利した俺たち。

そんな時、俺は花織の姿が見当たらないことに気づいた。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

［花織］

「……」

［オムニス］

「あ！　こんなところにいたのか。

急にいなくなったから心配したじゃないか」

［花織］

「ごめん。

ちょっと外の空気にあたりたくなっちゃって。

……すぐ戻るね」

［オムニス］

「……！」

［花織］

「……ん？　オムちゃん、どうかした？」

［オムニス］

「……いや、なんでもない。

ほら、さっさと行くぞ」

//ADV形式終了

//暗転

//場面転換：白い部屋

//ヴィジュアルノベル形式開始

白い部屋に戻って来た俺は、感慨深くため息を吐いた。

「ちょっと外の空気にあたりたくなっちゃって。」

この言葉に強い既視感を覚える。

まるで学生時代の青春の匂いが思い起こされるような、

そんな感覚……。

そんな時――

//ページ切り替え

突如として、俺は耐えがたい睡魔に襲われる。

視界がぼんやりとしたモヤに包まれる中で、

俺は知りもしない記憶を垣間見た。

それは、休日のファミレス……。

その時の俺は、数合わせだった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//ADV形式開始

//ファミレス・店内

［とびお］

他のクラスと合同で遊ぶことになったからさ、

とびおも来てくれよ。

［とびお］

特に親しくもない男子から誘われたのが、金曜の昼休み。

聞けば、女子と5対5で遊ぶ約束をしたはいいのだが、

男のメンツが1人足りなかったらしい。

［とびお］

断るという選択肢もあったのだが、人付き合いは重要だ。

下手に断って、残りの学生生活を気まずくしたくない。

それに土曜はどうせ暇だった。

［とびお］

というわけで俺は今、クラスの男子5人と、

隣のクラスの女子5人、計10人という大所帯で

ファミレスの一角を占拠していた。

［友人A］

「いやぁ、あの映画やばいよね～！」

［女生徒A］

「くっそやばかった～。

特に塗れ場！あんなのされたら最高じゃない？」

［女生徒B］

「うん、マジサイコー！」

［友人B］

「そうそう、俺たちサイコー！」

［とびお］

友人たちはみんな楽しそうに、女子たちと遊んでいた。

俺も流れに身をまかせて楽しめればよかったのだろうが、

普段つるんでいないからか、どうもノリが違う。

［とびお］

とは言え、盛り上がりに水を差すわけにもいかず、

しかたなく俺は頃合いを見てこっそりと店から出た。

外の空気にあたって、ちょっと休憩したかった。

［とびお］

ふと、外のベンチに同じように休む女子を見つける。

今日集まった隣のクラスの女子5人の内の1人だった。

名前はたしか――朝永花織。

［とびお］

「君も休憩？」

［花織］

「え？　あ、ごめん。

ちょっと外の空気にあたりたくなっちゃって。

すぐ戻るから……」

［とびお］

「いやいや、ゆっくりしてこうよ。

俺も同じ。ちょっと休憩。

あの場の空気にどうも慣れなくて。……隣、いい？」

［とびお］

言って、俺は花織の横に座る。

すると、彼女は珍しそうに俺の顔を眺めた。

［花織］

「慣れてないのに来たの？」

［とびお］

「いやぁ、実は俺、数合わせで呼ばれただけなんだよね」

=========================スチルカットシーンA開始=========================

［とびお］

正直にぶっちゃけると、花織は驚いたようだった。

だが、すぐに親しげな笑顔を浮かべる。

［花織］

「奇遇。

実はウチも、頭数合わせるために呼ばれたんだよね」

［とびお］

「本当に!?

じゃあ、数合わせは数合わせ同士、

ここでまったり話してよっか」

［花織］

「そうだね。

じゃあ、何から話そっか――」

=========================スチルカットシーンA終了=========================

//ADV形式終了

//ヴィジュアルノベル形式開始

数合わせ、という少し間抜けな共通点。

でも、気を通わすにはそれで十分だった。

俺は花織と世間話に花を咲かせ、

気づけば皆が店から出るまで語り合っていた。

ちょっと前までは憂鬱な土曜になるかと思っていたけれど、

今となってはかけがえのない土曜日だった。

//ヴィジュアルノベル形式終了

//1話END